

イスラエル アンベールド Vol.1 「ペテロの召命」



英語版オリジナル 2017年3月3日公開 : Israel Unveiled Vol 1:

Peter's Primacy

<https://youtu.be/EA2fbnmmXuA>

メッセージ by アミール・ツアルファティ

Behold Israel : <http://beholdisrael.org>

イエス時代のガリラヤ湖は、もっと大きく、水もずっときれいでした。もちろん、2,000年前には、湖を汚染するモーターボートはありませんでしたし、レクリエーション活動もありませんでした。また4世紀には、ガリラヤ湖北部で地滑りが発生し、湖は800mほど南方に押し広げられました。ですから、イエス時代には、この湖はもっと大きく、水ももっときれいだったのです。その水の清さと大きさ故に、当時は今よりも、もっと多くの種類の魚が生息していました。学者らが言うには、現在この湖で生息している魚が30種類ほどだとしたら、イエス時代には153種類の魚が生息可能だった事が、分かったそうです。ガリラヤ湖畔に住んでいたユダヤ人たちは、ガリラヤ湖で漁をして生活費の殆どをまか纳っていました。今私たちが居る所は、イエス時代、ユダヤ人漁師たちにとって主要な漁場だった所です。舟は、この古代の波止場に繋がっていました。ご覧のように、岩には見事な階段が刻み込まれています。漁師たちは、ここに舟を繋いで岸に上がり、網を繕ったり洗ったり、その他の物も洗ったりして必要な事は何でもしていました。そして漁の時間になると、階段を下りて舟に乗り込み、漁をしに湖へ漕ぎ出すのでした。

凍てつくような冷たいガリラヤ湖の水には、7つの泉から温かい湧き水が流れ込んで来ていました。ご存知のように、ガリラヤ湖の主な水源はヨルダン川ですが、実はその水はヘルモン山からの雪解け水です。7つの源泉からの温水が冷たい湖に流れ込むと、水温が生ぬるくなる場所が出来ます。私たち人間が、熱過ぎるお湯や冷た過ぎる水でシャワーを浴びるのが嫌なように、魚も同じです。極端な水温よりも生ぬるく心地よい温度を好みます。ですから、イエス時代の漁師たちは、ここが漁に適した場所である事を知っていました。それで、岩に階段が刻み込まれた見事な波止場が発見された時、私たちは驚きませんでした。舟はこの辺りに繋がられ、漁師たちは舟から降りて岸に上がると、網を繕ったり洗ったりし、獲れた魚は売り場へ運んで行きました。そして、漁の時間になるとここに帰り、あの階段を下りて舟に乗り込み、湖の深みに漕ぎ出して行ったのです。興味深いのは、まさしくここが、イエスが、最初の弟子たちを見つけた場所であった事です。ルカの福音書5章からも分かるように、そこはイエスが頻繁に教えていた場所でした。

「群衆がイエスに押し迫るようにして神のことばを聞いたとき、イエスはゲネサレ湖の岸辺に立っておられたが、岸べに小舟が二そうあるのをご覧になった。漁師たちは、その舟から降りて網を洗っていた。(ルカの福音書5：1-2)」

ゲネサレ湖というのは、ガリラヤ湖の別名です。明らかにそこは、漁師たちが岸に上がって網を洗う事が出来るように、舟が岩に繋がれていた場所でした。

「イエスは、そのうちの一つの、シモンの持ち舟にのり、陸から少し漕ぎ出すように頼まれた。そしてイエスはすわって、舟から群衆を教えられた。(ルカの福音書5：3)」

それは、美しい光景でした。イエスが座られる度に、それは教えが始まる事を意味していました。教師が座ると、皆話やお喋りを止め、他の事も一切止めて、その口から語られる言葉に耳を傾けました。人々は、イエスの口から出る言葉に驚きました。聖書には、イエスが権威を持って語られただけでなく、恵みの言葉を語られた、と記されています。人々は、当時のラビや(死海文書の)書士、パリサイ人たちが教えるのとは大変異なった教えを聞いて、とてもビックリしました。実のところ、本当に聖霊が内住していなければ、聖書を読んでも理解するのは難しいです。内容が呑み込めず、神が何を求めておられるのかを知るのは困難です。ある人たちにとっては、退屈に感じることもあったでしょう。当時の人たちにとって、ラビに教えられるのは、そんな感じだったのです。興味深い事には、イエスが、恵みの言葉を語られた事でした。そしてイエスは、人々の関心を引きました。イエスが座って教え始められると、岸に座っていた全ての人たちが、熱心に耳を傾けるのでした。聖書には、群衆がイエスに押し迫った、と書かれています。それは、イエスが来て、ビラを配りながら、「さあ、今から説教をするから聞きに来るといい」と呼びかけたのとは違います。聖書によると、「神のことばを聞く」ために、誰もがイエスに押し迫ったのでした。神のことばが、ガリラヤ湖のほとりに、神のみことばを教えに来られたのです。そして誰もが、確かに自分たちは神のみことばに耳を傾け、神のみことばを聞いているのだと認識していました。では、聖書を続けます。

「話が終わると、シモンに、『深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい。』と言われた。(ルカの福音書5：4)」

私はこの種のイエスの教えが大好きです。イエスは口で語られるだけでなく、人々にご自身の行動をもって教えたいと願われました。ご自分の語っておられることを、実際に行動をもって示しておられたのです。面白いことに、イエスはペテロに向かって言われます。「さあ、ペテロ。深みに漕ぎ出して、網を投げてみなさい。」イエスは、その網という語を複数形(nets)でおっしゃいました。イエスはペテロに、大漁に備えよ、と言われたのです。問題は、ペテロはもうそれは既に試し済みだったことです。

「するとシモンが答えて言った。『先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおことばどおり、網をおろしてみましよう。』(ルカの福音書5:5)」

面白いことに、ペテロはイエスを見つめながら、少し決まりの悪い思いをしています。彼は心の中でこう思っていたのです。「イエスは漁師じゃない。漁師の私が、ここで夜通し苦労しても何も獲れなかったんだ。イエスは、そういう時もあることをご存知ないのだろう。その事を言っておいた方がいいかも知れない。それに、何も獲れなかった時にイエスが恥をかかないように、網は一つだけ持って行った方がいいだろう。もし私がたくさんの網をおろして何も獲れなかったら、イエスが物凄く恥ずかしい思いをするだろうから。」面白いですね。ペテロには、イエスが彼に要求された信仰がありませんでした。ペテロは網を一つだけ

持って行きました。私たちの人生における体験も、殆どがそういうものです。イエスが私たちに何かを命じられる時、私たちが最終的にそのことから得るものは、私たちの信仰によって測られるのです。ペテロは網を一つ持って、深みへ漕ぎ出しました。そして、イエスに複数の網を持って行って湖面におろすようにと言われたにも関わらず、ペテロは網を一つしかおろしませんでした。聖書には、こう書かれています。

「そして、そのとおりにすると、たくさんの魚がはいり、網は破れそうになった。(ルカの福音書5:6)」

ペテロが持って行った哀れな網は、イエスが本当は真剣ではないか、又は間違っているかもしれないことを実証するはずが、反ってペテロ自身が大恥をかく結果となったのです。網が破れそうになったからです。ハレルヤ！何とも驚くべき事です。網は破れそうになったのでした！

「そこで別の舟にいた仲間の者たちに合図をして、助けに来てくれるように頼んだ。彼らがやって来て、そして魚を両方の舟いっぱい上げたところ、二そうとも沈みそうになった。(ルカの福音書5:7)」

神があなたを祝福したい時、物凄い祝福ですから、準備をしておいた方がいいですよ。もしも用意が出来ていなければ、あなたはその祝福の重みで沈んでしまうかも知れません。彼らは、沈みそうになりました。もし、ペテロが十分な数の網を持って来ていて、周りに十分な数の仲間がいたら、そんな事にはならなかったでしょう。しかし、ペテロが間違っていたことは、証明されました。そして彼らは沈みそうになっていました。

「これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、『主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。』と言った。(ルカの福音書5:8)」

ここにはペテロの美しさが描かれています。初めは、ペテロは常に大変頑固で、とても高慢でした。しかし、そんなペテロにイエスが接していかれることで、最終的にペテロは砕かれます。しかし、ペテロが完全に砕かれるには、約3年かかります。

「これから後、あなたは人間をとるようになる」とイエスから言われたペテロは、今、全てのものを捨てようとしています。ペテロはその暮らしを捨て、収入源を捨て、網を手放し、直ちにイエスについて行きました。それは立派な信仰です。けれど、物理的にイエスに従っていても、霊的には従っていない事があるものです。

3年の間、ペテロはイエスに従って行きました。北部の地方、ガリラヤ、エルサレムへの道のり、そしてエルサレムへと、どこにでもついて行きました。それでも、ペテロはイエスのメッセージの本質を全く掴んでいなかったのです。ペテロが「イエスは生ける神の御子である、彼こそがキリストである」と認めた瞬間から、イエスは彼らに、人の子は捕らわれ、十字架にかけられ、葬られ、甦らなければならないと、告げ始められました。

キリストの復活に関しては、キリストご自身の言葉によって、弟子たちに知らされていたのに、彼らはその事を問題にしようとさえしませんでした。彼らにしてみれば、イエスは死ぬはずがなかったからです。彼は贖い主であり、メシヤであり、救い主でした。そのメシヤが死ぬ事には、意味がありませんでした。ユダヤ教の信条やユダヤ人の伝統によると、メシ

ヤは、血と肉を持った人間であり、平和と繁栄をもたらし、ユダヤ人への抑圧を終わらせるために来ることになっていました。ですから、彼が死ぬことはありません。

面白いのは、イエスが十字架にかけられようとしていた時、ペテロがイエスを3度、否定したことです。ペテロは打ちひしがれました。ペテロは「そんなことは絶対にない」と否定したのに、イエスが予告された通りに、イエスを否定してしまった自分がただけでなく、自らの主であり、メシヤであり、贖い主であるお方が、世界で最も残酷な十字架刑に処せられるために、連れて行かれてしまったのです。言葉になりません。ペテロは自分の主が十字架の上で死ぬのを見ていました。そして主は死ぬと、墓に運ばれて行きました。ペテロは打ちひしがれています。それは、彼がイエスを否定したからであり、また、彼の抱いていたメシヤ像が、粉々に砕け散ったからです。彼はまた、それまで出来ていた事が上手く出来なくなって、落ち込んでいます。

聖書によると、イエスの復活後、ペテロはガリラヤ湖に戻りました。彼は元の生活に戻ろうとしました。以前の職業に戻ろうとしました。そこに祝福があるだろうと考えたからです。

しかし、ヨハネの福音書21章からは次のことが分かります。ペテロは再び、ガリラヤ湖の中でも、漁師たちにとって最良の漁場に行こうとしていました。ちょうどここ、タブハと呼ばれる場所です。このヘプタペゴンとも呼ばれる場所です。そして又もやペテロは、一匹たりとも獲ることが出来なかったのです。イエスのミニストリーが一番初めに、まさにこの場所で最初の弟子たちを見つけた時に始まった輪が、ここで見事に完成します。

今や、主はすでに復活され、弟子たちは粉々に砕かれています。キリストの復活がこの上なく素晴らしいものである事が、まだ彼らには本当に理解出来ていません。彼らには分からないのです。彼らはまだ聖霊を受けていませんでした。まだ復活の力を得ていませんでした。そして彼らはガリラヤに戻って来て、以前の生活に戻ろうとしていました。ヨハネの福音書21章に、こう書かれています。

「この後、イエスはテベリヤ（ガリラヤ湖の別名）の湖畔で、もう一度ご自分を弟子たちに現わされた。その現わされた次第はこうであった。シモン・ペテロ、デドモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子たち、ほかにふたりの弟子がいっしょにいた。シモン・ペテロが彼らに言った。『私は漁に行く。』（ヨハネの福音書21:1-3）」

それは、シモン・ペテロが唯一、知っていた事でした。それは唯一、彼がやり慣れていた事でした。彼は漁をしながら成長しました。それが彼の本職だったのです。彼は、自らの召命、夢、端的に言えば自らの使命をエルサレムに置き去りにして、もはや召命の場所でも、人生の目的地でもなくなった場所に戻ろうとしていました。そして祝福されることを期待していたのです。

「彼らは言った。『私たちもいっしょに行きましょう。』彼らは出かけて、小舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。（ヨハネの福音書21:3）」

聞いたことがあるような話ですね。その夜は何も獲れませんでした。漁師がこの辺りで何も獲れないというのは、すごく珍しい事です。夜通し苦労しながら何も獲れなかったことで、ペテロの心には、突然思い出される事があったはずだと思います。彼はおそらく、「ああ、3年前にも同じ事があったぞ」と思ったことでしょう。続きも面白いです。

「夜が明けそめたとき、イエスは岸べに立たれた。けれども弟子たちには、それがイエスであることがわからなかった。イエスは彼らに言われた。『子どもたちよ。食べる物がありませんね。』(ヨハネの福音書21:4-5)」

非常に美しい光景です。イエスがそこに立っておられます。私たちには、それがいつもの変わらないイエスであることが分かっています。しかし、彼らには、復活を信じることの必要性がしっかりと理解出来ていませんでした。復活が起こったということ、そして、それが最も重要な事であるということが、彼らには呑み込めていなかったのです。彼らは、復活の力がどういうものなのか、分かかっていませんでした。死に勝利された生ける神を信じるということが、どういうことなのか分かかっていませんでした。そのため、彼らは塞ぎこんでいました。とても悲しかったのです。この章全体には、全く喜びがありません。彼らは舟に乗りますが、ペテロはあまり口を開くこともありませんでした。「私は漁に行く。」「私たちも一緒に行きましょう。」それだけです。優しく、愛情に溢れ、思いやりのこもった声で語り掛けられたのは、イエスでした。

「子どもたちよ。何か獲れましたか。食べる物がありませんね。」彼らの返事も面白いです。

「彼らは答えた。『はい。ありません。』(ヨハネの福音書21:5)」

みんなが一斉に「ありません」と言う場面が、目に浮かんでくるようです。それは絶望的な答えでした。「私たちは惨めです。もうどうしていいか分かりません。私たちは打ち砕かれています」という気持ちが、そこに込められていました。そんな思いが、この辺りにこだましていました。

「イエスは彼らに言われた。『舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。』(ヨハネの福音書21:6)」

イエスが権威を持って語られたという事実は、もうお話ししましたね。権威は、どんな人でも察知できるものです。どんな人でも、誠実な人の口から発せられる、偽りのない指令や真理の言葉を見極めることが出来ます。イエスは非常に確信と権威のある語り口で、舟の右側に網をおろせば魚が獲れる、とおっしゃいました。片側では何も獲れないのに、反対側では大量に獲れるという確率は、どの位でしょうか。ゼロにも満たないでしょう。しかし、イエスの声とその言葉に秘められていた自信が、岸に立って語りかけているのが誰であるのかを、彼らにただちに気づかせたのです。聖書にはこう記されています。

「そこで、イエスの愛されたあの弟子がペテロに言った。『主です。』(ヨハネの福音書21:7)」

もちろん、これは彼らが魚を獲った後のことでしたが、ヨハネは、イエスの命令の言葉だけでなく、声のトーン、話し方、振る舞いがイエスのものだと気づいたのでした。感動的です。ヨハネはペテロに言います。「主です。」イエスが今も主であられると思うと、心が安らぎませんか。

イエスは、もはや失われた希望でもなく、粉々に砕かれた期待でもありません。イエスはやはり主であられたのです。

「そこで、イエスの愛されたあの弟子がペテロに言った。『主です。』すると、シモン・ペテロは、主であると聞いて、裸だったので、上着をまとして、湖に飛び込んだ。(ヨハネの福音書21:7)」

舟は岸にとっても近い所にあつたので、ペテロが沈んで溺れることはなかったでしょう。明らかに、そこは足が水底に届く場所で、上着を着たまま水の中を歩ける場所でした。ペテロは、「これがイエスなら、私はおそばにいたい」と確信していました。

ここで素晴らしいのは、イエスが岸におられて、弟子たちのために朝食を用意されていたことです。彼らが魚を獲ったかどうかも気にしておられません。彼らが何を持ってくるかは重要ではありません。イエスは彼らのものを必要とはされません。イエスは、信仰以外には、私たちに何も求められません。イエスは私たちの事をとっても大切に思ってくださいるので、私たちがそこにいなくても、私たちがまだそこに辿り着いていなくても、既に私たちのために朝食を用意してくださっているのです。既に私たちのために食卓を整えてくださっているのです。

ペテロはずぶ濡れでイエスの前に歩いて来ます。そして、恥じ入って、罪悪感に満たされ、心砕かれています。もうプライドはありません。傲慢さもなくなりました。空っぽになったペテロです。

私はその時こそが、ペテロを任命して仕え始めさせるのに、つまり、ペテロを奉仕に任命するのに、まさに適切な時であったのだと思います。私たちは、キリストから離れては、何もする事ができないからです。面白いことに、聖書にはこう書かれています。

「しかし、ほかの弟子たちは、魚の満ちたその網を引いて、小舟でやって来た。陸地から遠くなく、百メートル足らずの距離だったからである。こうして彼らが陸地に上がったとき、そこに炭火とその上に載せた魚と、パンがあるのを見た。イエスは彼らに言われた。『あなたがたの今とった魚を幾匹か持って来なさい。』シモン・ペテロは舟に上がって、網を陸地に引き上げた。それは百五十三匹の大きな魚でいっぱいであった。(ヨハネの福音書21:8-11)」

イエス時代のガリラヤ湖には153種の魚が泳いでいたと知った時、私は、主の御業は何と驚くべきものかと思いました。1種類ずつの魚が、全て、舟の片側で待っていたのです。そのひとり子を惜しまれなかつたお方は、ましてや、その御子とともに、私たちに全てのものを与えてくださらないことはない事を、示しておられるのです。

という訳で、153匹の魚が岸に引き上げられています。イエスは朝食を用意しておられます。早朝の時刻です。ペテロの心臓は激しく鼓動しています。彼らが岸に着くや否や、イエスは言われます。

「イエスは彼らに言われた。『さあ来て、朝の食事をしなさい。』弟子たちは主であることを知っていたので、だれも『あなたはどなたですか。』とあえて尋ねる者はいなかつた。イエスは来て、パンを取り、彼らにお与えになった。また、魚も同じようにされた。(ルカの福音書21:12-13)」

イエスは彼らのために朝食を用意されただけでなく、彼らに朝食を給仕されました。イエスはパンと魚を取り、彼らにお与えになりました。彼らは皆、復活された主、彼らが十字架の上で見たお方、彼らとその遺体を見たお方、死なれたと絶対に確信していたお方が、今、目の前におられ、朝食を調理し、給仕しているという事実、すっかり驚嘆して立っていました。ペテロには、あることが分かっています。遅かれ早かれ、イエスを否定した事を説明しなければならないことを。ペテロは後ろめたさと罪の意識でいっぱいでした。

私たちは、人生を通じて、何度も、イエスを否定します。時には言葉によらず、他の人々にイエスを伝えるのを避けることで、私たちはある意味、イエスを否定するのです。けれども、イエスは非難してはおられません。事実、イエスはそれとは全く異なることをなさっています。

「イエスが、死人の中からよみがえってから、弟子たちにご自分を現わされたのは、すでにこれで三度目である。彼らが食事を済ませたとき、イエスはシモン・ペテロに言われた。『※ヨハネの子シモン。あなたは、この人たち以上に、わたしを愛しますか。』（ヨハネの福音書21:14-15)」

(※英語キングジェームス訳で、この箇所は“ヨナの子”と書かれています。)

イエスは彼らが朝食をとるまで待っておられました。「まずは食べなさい。」イエスはペテロの朝食を台無しにたくありませんでした。

食事が終わると、ペテロは、来るだろうと分かっていた対決の瞬間を迎えます。イエスがペテロに訊かれます。「ヨナの子 (バルヨナ)、シモン。」私は、なぜイエスが「ヨナの子」という表現を使われたのか、しばしば思い巡らします。

ペテロの父親がヨナという名だったのかもしれませんが、しかし、私たちは一つの事を知っています。ヨナという名が、ある預言者の事を思い出させることです。彼は神の召命から逃げ出そうとして、どこか別の場所に行こうとしましたが、神は憐れみ深く彼を連れ戻し、彼が行かなければならない場所へと送り出されました。

ヨナは、ペテロの体験を完璧に例示しています。イエスは、ペテロをミニストリーに送り出そうとしていました。ペテロは、ヨナのようにならない事、その召命から逃げ出してはならない事を理解しなければなりません。「使徒の働き」で、ペテロがヨナの訪れたヨッパにいて、きよくない物を食べることに對して「主よ。それはできません」と言ったのがヨッパであった事は、驚くに当たりません。神はそこでペテロを正さなければなりません。神は言われました。「わたしがきよめた物を、きよくないと言ってはならない。わたしが送ろうとしているところに行きなさい。」

そしてペテロは聞き従ったのでした。ペテロは、イエスから離れては何もすることができない、という理解に達しました。イエスがヨハネの福音書15章5節で言われた通りです。

「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。(ヨハネの福音書15:5)」

ペテロはそれを実感しました。ペテロはそれを体験しました。

ペテロはキリストを離れると、自分は迷い出してしまうことを理解しました。「キリストは私のアイデンティティーであり、彼と一緒にいると私は本当に生き生きと活躍できるのです。彼なしでは、私は何もすることができません。」

イエスは、ペテロに「あなたはわたしを愛しますか」と問われた時、ペテロがご自身のことを主として、また神として認めるのを待たれました。そしてペテロがやっと、「主よ。私はあなたをアガペーの愛で愛します」と答えた時、イエスは問うのを止められました。初めの2回は、ペテロは「私はあなたをフィレオの愛で愛します。私はあなたを友の愛（フィレオ＝フィラデルフィア）で愛します」と言ったからです。

では、イエスがペテロに、ご自身に対する愛を示すためにして欲しいと願われたことは、何でしょう。「わたしの民に仕えなさい。わたしの羊を飼いなさい。」

神への愛を示す究極の証は、私たちが互いに仕え合い、養い合い、世話をし合う、その在り方にあります。それは、聖職についたり、世話を受けて仕えられたりする対象となることではありません。他者に仕えたり、他者の面倒を見たり、他者を養ったりすることによって、福音の使者となることなのです。

ペテロにはそれが分かりました。彼はそれを理解しました。彼はその時、そこで、イエスから任命を受けたのです。その瞬間から、ペテロの人生はすっかり変わりました。神に使われるためには、彼は砕かれなければならない、空にされなければならないませんでした。

主にある兄弟姉妹の皆さん、キリストの内に留まるための、実に良い秘訣は、自己に終わりを告げ、自分のプライドや傲慢さ、自分の希望や願いに終止符を打ち、自らを生きた供え物として捧げることです。そして私たちが自分の道を主に委ね、自分の意志を主の前に放棄するなら、その時、主は私たちの行く道を整えてくださいます。

イエスがその最初の弟子を見つけたこの場所は、3年後に、イエスがペテロに「わたしの羊を飼いなさい」と命じられた場所となったのです。